古志の八岐大蛇は，越の国の自然現象？

地元の古い文献を科学的視点で読み返してみよう

荻野慎諧　恐竜渓谷ふくい勝山

背景

サメの歯化石が「天狗の爪」と称されて様々な地域で記載されていたように，日本で科学が一般に普及する前の地質現象は，毎年のように起こっていた．ただし，自然現象を当時の知見でつぶさに観察し，記録されたものであっても，それがなかなか正確な解釈ができず，それらが「怪異」として扱われ今に残っているものも少なくないのではないか．これは日本に限らず世界中にみられるだろう．

現代型の学術体制が整う以前の記録には各地域で見過ごされていた情報・資料が存在しているのではないか．これらの再発見は，地質学の範疇にとどまらず民俗学などにも波及し，地域の地誌へ興味を持つ人々が増えるのではないだろうか．

その一例として，今回は，出雲と関りが深いとされる八岐大蛇について再考してみることにする．

伝統的解釈

月岡国芳の「日本略史 素戔嗚尊」に見られるように，八岐大蛇は洪水であったという解釈が現在も支配的である．

寺田寅彦の「火山説」

洪水説以外の考え方

昭和8(1933)年 寺田寅彦（地球物理学者） 八岐大蛇火山説

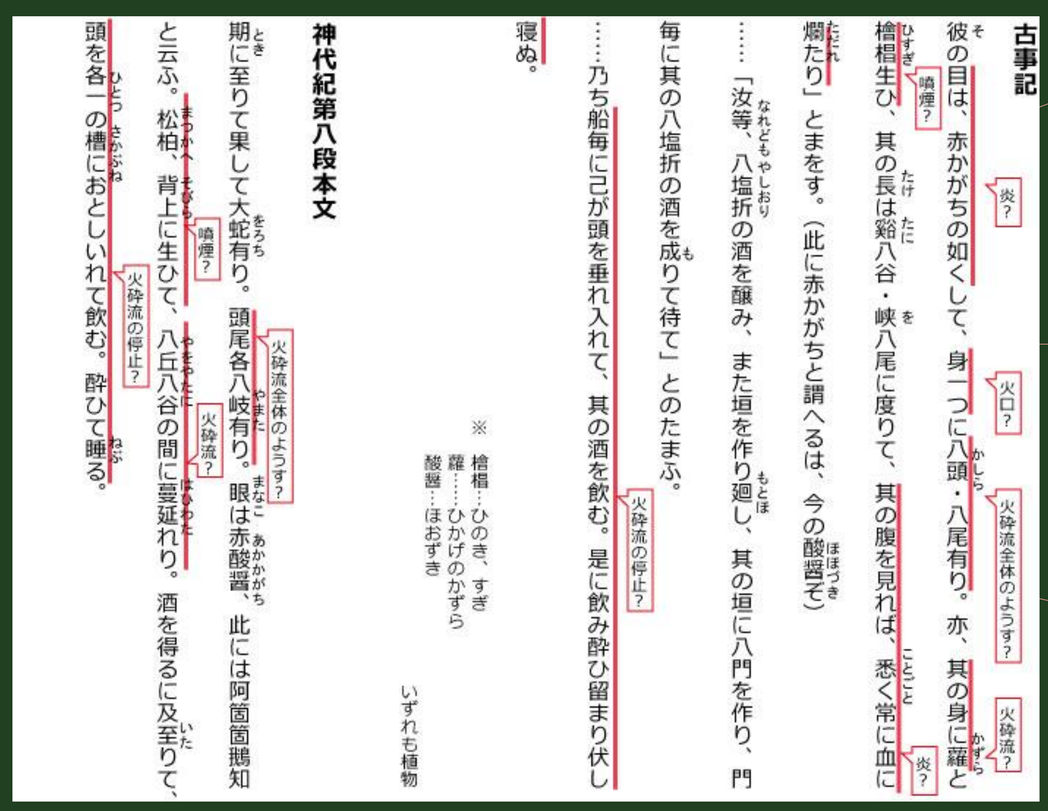
問題点

八岐大蛇の描写はひとつひとつが火山説を裏付けるものだったが，寺田本人も「噴火現象」を目の当たりにできなかった

改善点

普賢岳噴火，御嶽噴火等で，誰もが噴火現象における火砕流をイメージできる時代になった

日本書紀･古事記の記述



古事記

彼の目は、赤かがちの如くして、身一つに八頭・八尾有り。亦、其の身に蘿と檜榲生ひ、其の長は谿八谷・峡八尾に度りて、其の腹を見れば、悉く常に血に爛たり」とまをす。（此に赤かがちと謂へるは、今の酸醤ぞ）

……「汝等、八塩折の酒を醸み、また垣を作り廻し、其の垣に八門を作り、門毎に其の八塩折の酒を成りて待て」とのたまふ。

……乃ち船毎に己が頭を垂れ入れて、其の酒を飲む。是に飲み酔ひ留まり伏し寝ぬ。

※ 檜榲…ひのき、すぎ
蘿……ひかげのかずら
酸醤…ほおずき
いずれも植物

神代紀第八段本文

期に至りて果して大蛇有り。頭尾各八岐有り。眼は赤酸醤、此には阿箇箇鵝知と云ふ。松柏、背上に生ひて、八丘八谷の間に蔓延れり。酒を得るに及至りて、頭を各一の槽におとしいれて飲む。酔ひて睡る。

炎？　噴煙？　火口？　火砕流全体のようす？　火砕流？　炎？　火砕流全体のようす？　噴煙？　火砕流？　火砕流の停止？　火砕流の停止？

カラー　洪水説＜火山説

赤々とした目，
口や血の滴る胴体

外見　噴煙のこと？

胴体は鬘（ヒカゲノカズラ）
背中から柏檜（かしわ・ひのき）が生える

行動　防災の土木事業

８つの台に準備した酒を満たした甕に首を突っ込んで，酔っぱらって眠る

其の御佩しせる十拳の剣を抜きて
其の蛇を切り散ししかば
肥の河 血に変じて流れき。

退治の段に入ってはじめて「蛇」の文字が出てくる．
溶岩を切断した時の表現？

「火砕流」という概念の登場

火砕流＝
戦後，東大名誉教授の荒牧先生に提唱された言葉
英語表記「pyroclastic flow」
パイロ＝火、クラスティック＝破砕、フロー＝流れ

写真･映像････記録の進歩

現代になり，だれもが火砕流を写真や動画で目の当たりにできるようになった．

八雲立つ
出雲八重垣
妻ごみに
八重垣作る
その八重垣を

須佐之男命が詠んだ日本初の短歌とされるが，冷静に読むと防災のための土木工事のことでは？

どこの火山がモデルか？

出雲国ならびに越国の火山が候補とすると･･･

	三瓶山	白山	新潟焼山
場所	島根県	福井県	新潟県
最近の噴火	3,700年前	1,000年前まで	2,000年前？（第2期）
肥川	斐伊川	九頭竜川？	糸魚川？
酒甕	火口湖	火口湖	—
草薙の剣（製鉄？）	有	有	？

- 白山･焼山と八岐大蛇が関連する記録はない
- 縄文時代の三瓶山噴火がモデルだとしても，古すぎないか
- 噴火規模，時期や溶岩流を考えると新潟焼山が有力では